

三 郎 山 乙 （ あ と が き ）

◆今回の特集も、前号同様の小特集となった。題して、「長野県のことばと古書店」。学生に人気のある研究テーマ（方言研究）の基礎資料と、勉強に深い関わりのある古書店にスポットを当ててみた。後者は、高橋輝次氏のお仕事（『古本屋の自画像』燃焼社〈大阪〉1996.12等の古本屋シリーズ）を気取ったものだが、好評ならば、今後、県下各地の古書店にもご寄稿をお願いしていきたい。

◆特集巻頭の目録は、県立長野図書館・ライブラリー82（八十二銀行文化財団）等に足を運んで仕上げた労作である。今後は、先行目録と合わせて一本化し、執筆者別・テーマ別の索引を付すなどして、利用しやすい形態をとりたい。その過程で、さらに情報をお寄せいただけるとありがたい。

◆特集の後半は、山崎書店（長野市鶴賀緑町）の店長・山崎晴樹さんにご登場いただいた。山崎書店は、先代のお店が若松町にあった時からの常連が多い。先代のお人柄に惚れ込んだ古書好きは、そのまま二代目店長・晴樹さんのファンになっている。かく言う小生も、先代・松十氏に高校時代からかわいがっていただいた。学生街にあったお店では、学習参考書も扱われており、そこから古書の世界に入り込むことになった。決して上客とは言えない一高校生を、一人前扱いしてくださった暖かい方だった。若松町時代の山崎書店については、小野三郎『山崎書店主人』（アトリエ SUR 1993.12）も必読の作品である。なお、二代目の晴樹さんの緑町店も、古書探しの楽しさの味わえる店舗となっている。集うお客さん方にも、話のおもしろい方が多い。その一端がつい先頃「[店 仲間たち] 催し生み出す自由な雰囲気」と題して『信濃毎日新聞』夕刊（2000.3.3）に紹介された。

◆特集外論文として、今回も李仁淳氏から力作をいただいた。氏のワイフワークとも言うべき漢字・漢語研究のますますの進展を期待したい。

（大橋敦夫）